夢二とキリスト教

――「竹久夢二抒情画展覧会」（1918 年）をめぐって――

小　嶋　洋　子

は　じ　め　に

竹久夢二（明治 17 年－昭和 9 年，1884 年－1934 年）が聖書を常に携帯していたことやその作品にキリスト教の影響が見られることはよく知られていることだが，夢二とキリスト教の関わりの詳細については，先行研究においてまだほとんど明らかにされていない。夢二の作品においてキリスト教的な要素がみられるものは，「南蛮趣味」という観点で解釈されることが多く，その他のキリスト教的な作品については，それほど詳しい検討が加えられることがなかった。拙論では，夢二とキリスト教の関わりを大正 7 年（1918 年）に行われた「竹久夢二抒情画展覧会」の際の『竹久夢二抒情画展覧会目録』から考えてみたい。この「竹久夢二抒情画展覧会」は，これまでそれほど注目されてこなかった。しかし，この展覧会は，夢二とキリスト教が語られる際にしばしば言及される「南蛮趣味」のキリスト教的作品，そして，「南蛮趣味」では解釈できない作品を同時に含んでいるという点で注目に値する。とくに，「南蛮趣味」では説明できない作品が，一体何を根拠としているのかを考察していく。

以下では，『竹久夢二抒情画展覧会目録』に焦点を絞り，各展示室の特徴を明らかにした上で，「南蛮趣味」とはいえないキリスト教的要素を指摘できる作品を解釈していく。そして，そのような作品を描いた夢二を取り巻いたキリスト教的環境を浮き彫りにしていく。

1.『竹久夢二抒情画展覧会目録』について

「竹久夢二抒情画展覧会」は大正 7 年（1918 年）4 月 11 日から 20 日の間，京都府立図書館にて行われた。そしてこの展覧会は同年 5 月 18 日から 20 日には神戸のキリスト教青年会館へ巡回している。大正元年（1912 年）京都ではじめて行われた個展「第一回夢二作品展覧会」については，高梨章氏の研究をはじめ詳細な論証があるが，この「竹久夢二抒情画展覧会」についてはあまり紹介されておらず，いまだ不明な点が多い。

拙論では，「竹久夢二抒情画展覧会」開催時に作成された目録を中心に論を進めていくが，目録は次のような項目で構成されていた。

・恩地孝四郎からの文章（1～6 頁）
・有島生馬からの文章（7～11 頁）
・竹久夢二の文章（12, 13 頁）
・出品目録（14～21 頁）
・図版（10 点，頁数なし）

この目録の出品目録から会場が第一室，第二室，第三室という三つの部屋から構成されていたこと，そして各部屋の展示作品数が，第一室には 29 作品，第二室には 41 作品，第三室には 12 作品であったことがわかる。以下では，まず，キリスト教との関連において，この第一室，第二室，第三室の特徴を見ていく。

1−1．第一室について

第一室に展示されていた作品数は 29 点だった。全体数が 82 点であったので，35％ の作品が第一室に集められたということになる。

第一室は，《切支丹波天連渡来之図》，《室之津懐古》，《九連環》，ここでは《屏風》となっている《旅の唄》《邪宗渡来》など現在夢二の作品カタログで目にすることが容易な作品が展示されていたことがわかる。

そしてこれらの作品は，キリスト教との関連で考察する時には通常夢二の「南蛮趣味」という観点で語られる。夢二のいわゆる「南蛮趣味」は，1909 年の北原白秋『邪宗門』に端を発する南蛮ブームとの関連を時代的に見過ごすことはできない。

「南蛮寺門前」で「南蛮趣味」の代表者の一人と目される木下杢太郎は，キリスト教に触れながら南蛮文学についてこのように述べている。「南蛮文学と云うのは，日本の初期切支丹，或は其頃のポルツガル，エスパニヤの人々などの事を取り入れた詩，戯曲の事を指す」(1)。

「日本の初期切支丹」「ポルツガル，エスパニヤ」というのはもちろんキリスト教の教派でいえばカトリックであり，夢二の「南蛮趣味」と「キリスト教」が結びつく時，それはおのずとカトリックの世界が表現されることが予想できよう。実際，夢二による「南蛮趣味」の作品を見ていくと，具体的にカトリックを示すものが書き込まれているのだ。

たとえば，夢二はイエズス会宣教師をしばしば描いている。夢二の作品においては，イエズス会宣教師は遊女とともに描かれることが多く，第一室の作品にもその例がみられる。《切支丹波天連渡来之図》,《室之津懐古》などが該当する作品である。

また，ロザリオもカトリックを指示するものとして画面から読み取ることができる。ロザリオは《切支丹波天連渡来之図》などに描かれている。そのほか,《修道院晩秋》,《ふらんしすかん》といった作品にも「修道院」や「聖フランチェスコ」などカトリックが容易に連想されるタイトルが並んでいる。

このようにキリスト教の観点から見たとき，第一室には南蛮趣味，カトリックの世界を表した作品が集められていることがわかるのだ。

1−2．第二室について

第二室は，3 つの部屋の中で最も多い作品数が展示されていた部屋である。全体の半数である 41 作品が展示されていた。第二室の作品は,《椅子によれる女》,《舞姫》など，なかには一連の「抒情画展覧会ハガキ」(2)で作品を確認

できるものもあるが，どのような作品であったのか不明なものが多い。

そんななかで，目録に図版が掲載されている作品《寂しき食卓》（図 1）では，テーブルでパンを切ろうとする女性の奥の壁に聖女の絵がかけられている。キリスト教を想起させる画面ではあるが，第一室のような南蛮趣味といったような特徴は見られない。作品自体は不明なものが多いのだが，タイトルなどから推察すると，第二室は全体的にキリスト教の色が濃くない展示空間だったと思われる。

1−3．第三室について

第三室の作品は 12 作品である。他の 2 室と較べて最も少なく，全体の 15％弱のボリュームということになる。しかも，現在出版されている夢二のカタログで確認できない作品がほとんどである。にもかかわらず，展覧会開催時の目録の図版には，第三室の作品が実はいちばん多く掲載されていた。

展覧会目録中の出品目録にタイトルが記されていた作品は，先に述べたように 82 作品であった。だが，そのなかで図版が掲載されていたのは 10 点のみである。これらの掲載図版を展示部屋ごとに区分けしてみると，第三室の作品が 6 点，第二室の作品が 4 点となる。その一方で，現在，夢二の代表作としてなじみ深いものが集まっている第一室の作品は，当時の展覧会目録において，図版が 1 点も掲載されていない。

このように，展覧会全体の作品数から見ると，第三室の作品は全体の 15％にすぎないという少なさではあるが，目録に掲載されていた図版としては，その 6 割が第三室の作品であるという偏りがわかる。

そして，夢二とキリスト教，さらにいえば，夢二と「南蛮趣味」とは異なるキリスト教的世界の関係を考える時，この第三室は，作品数は少ないながらも作品の重要度という点においては第一室に負けず重要なものとして考えられるのだ。

第三室の作品の中で現在最も知られている《SPRING》に関しては，キリスト教学の関谷定夫氏がユダヤ教との関連を指摘している。この作品は有名で

あるが，解釈が難しい作品としても知られている。関谷氏は，夢二が「手はヘブライ語で『しるし』とか『記念』を意味し，墓碑の彫刻などによく用いられていることを知っていた[3]と推察している。夢二が聖書を常に携帯し，ユダヤ人に親しい感情を抱いていたことはよく知られていることだが，この指摘は「南蛮趣味」とは異なる夢二のキリスト教的世界へのアプローチが窺えるものだろう。

さらに，第三室の作品のタイトルを見ると，キリスト教的な世界を想起させるものがいくつかある。たとえば，《悲哀の奥に聖地あり》（図 2），《埋葬》（図 3）などがそうである。

だが，これらの作品はキリスト教的な雰囲気を漂わせつつも，第一室の《切支丹波天連渡来之図》《室之津懐古》といった作品とは異なり，イエズス会士やロザリオといったカトリックのアイテムが描かれてはいないことは注目に値する。

また，第三室には《愛》（図 4）という作品がある。夢二の作品でタイトルが《愛》となると，夢二自身の女性遍歴から男女間の愛をイメージしがちだが，この作品はそのような予想を裏切るものである。

青年が植物を手にし正面を見つめる画面だけからは，この作品のタイトルが《愛》だとは想像しがたい。だが，日記のなかで夢二は，この「愛」はエロスではなく，信仰や神を想定していたことを述べている。足を動かして空へ上るという夢を見た夢二は，「友人にそのはなれわざや信仰がこんな神力を与へたことを見せたりする。『愛』の青年のような心持で花の草を一本もつてぢつと心持を集中するとだんだんからだがういて来る」[4]と書いている。

この日記は，「竹久夢二抒情画展覧会」と同年の大正 7 年 8 月 11 日のものであり，「花の草を一本もつて」という表現から，この展覧会に出品された《愛》に間違いと考えられる。「信仰」や「神」を「愛」に結びつける点は，やはりキリスト教的だといってよいだろう。このように第三室の作品については，夢二がその制作に際してキリスト教を念頭においていた例がみられるのだ。

2．第三室の作品《カンニットフェルスタン》

次に，第三室の中から作品をひとつ詳細に見ていきたい。第三室の作品に《カンニットフェルスタン》（図 5）というものがある。この作品は所蔵者が不明であり，現在入手可能なカタログにも掲載されていないものだが，当時の展覧会目録には図版が掲載されていた。ここでは，この《カンニットフェルスタン》を夢二と「南蛮趣味」とは一線を画するキリスト教的作品とのつながりを示唆するものとして取り上げたい。

《カンニットフェルスタン》という語の由来は，ドイツの作家ヨハン・ペーター・ヘーベルの『ラインの家の友の珠玉集』（1811 年）に収められている暦話「カンニットフェルスタン」だと思われる(5)。

「カンニットフェルスタン」の内容は簡単に言うとこうだ。大都会アムステルダムへ出てきたドイツの田舎町出身の若い職人が立派な邸に感銘を受け，通りすがりのオランダ人にその邸の持ち主は誰かと尋ねた。すると，何を聞かれたのかわからなかったオランダ人は，「わかりません」という意味の「カンニットフェルスタン」と答えた。だが，ドイツ人は，持ち主の名が「カンニットフェルスタン」だと勘違いしてしまう。ドイツ人はそこで貧しい自分とお金持ちの「カンニットフェルスタン」を較べ，自分を哀れと思う。そしてそのあと，ドイツ人は葬列に出くわし，参列者にこの葬式が誰のものかを尋ねた。返ってきた答えは，ここでも「カンニットフェルスタン」であった。これを聞いたドイツ人は「現世のはかなさ」「自分の運命に満足すること」を学ぶというものである。

ここで，このあらすじをふまえて，第三室の作品《カンニットフェルスタン》を見てみよう。画面右に帽子を被った横向きの男がいる。そして，近景には葬列，中景には教会が描かれている。この画面を暦話「カンニットフェルスタン」に照らし合わせてみると，この作品は，あきらかに「カンニットフェルスタン」の最後の葬列の場面が描かれているとみなせよう。

《カンニットフェルスタン》の日本の受容については現在調査中であるが，夢二が何らかの手段でヘーベルの暦話の内容を知った上で，《カンニットフェルスタン》を制作したことが暦話の内容と描かれた画面の類似から指摘できる。

「カンニットフェルスタン」が収められた『ラインの家の友の珠玉集』（*Schatzkastlein des rheinischen Hausfreundes*, 1811 年）はヘーベルの代表作である。ヘーベルは，バーデン大公国の暦の編集の任を任されており，この『ラインの家の友の珠玉集』は，バーデン大公国の暦に載せられた暦話を集めたものである。この当時，暦は「聖書や祈祷書と並んで，貧しい一般家庭にもあった唯一の書物」(6)であったという。

ヘーベルは散文家として後世の人々に高く評価されており，とくにゲーテ，ベンヤミン，ハイデッガー，ホフマンスタールからの賞賛は有名であるが，ヘーベル自身は散文家である前に著名な聖職者であった(7)。

ベンヤミンが，この『ラインの家の友の珠玉集』を取り上げた文章のなかで，「散文家ヘーベルのうちには，また，プロテスタント的な規律が真直ぐに作用しつづけている」(8)と述べている。ここでベンヤミンはルターを念頭においているのだが，ベンヤミンが「プロテスタント的な規律が真直ぐに作用しつづけている」と述べるのを待たずとも，『ラインの家の友の珠玉集』を一読すれば，プロテスタント的な世界との関わりにすぐさま気づくことができる。

夢二には「南蛮趣味」という観点からは説明しがたいキリスト教的作品がある。さらに，夢二と当時のキリスト教との関わりを追っていくと，カトリックではなくプロテスタントとの関係が非常に色濃いものだと分かってくる。

3. 夢二を取り巻いたプロテスタント

夢二が生涯聖書を手放さず，キリスト教の世界と親しんでいたことは今さら指摘するまでもないが，彼がキリスト教のなかでも特にプロテスタント的環境の中に身を置いていたという事実は案外見過ごされがちだと思われる。

夢二が関わりをもった人々を見ていくと，プロテスタントに属する人々が多いことが分かってくる。たとえば，夢二が「内村鑑三と安部磯雄の講演を聞いて」(9)と述べていることがよく引用される。もちろん内村や安部の著作などによって感銘を受けることはあったとしても，夢二が実際に内村や安部と親交があったといえば，それはあまりなかったのが実際のようである。ここでは特に，『竹久夢二抒情画展覧会目録』に掲載されている幾人かの所蔵者と，夢二と交流があり，たびたび説教を聞く機会があった木村清松牧師と植村正久牧師についてみてみたい。

『竹久夢二抒情画展覧会目録』に作品の所蔵者として名が記されている星島義兵衛は，夢二のパトロンである。また，星島義兵衛の弟である星島二郎も夢二の日記にしばしば登場し，親交があったことがうかがえる。星島二郎は政治家として著名だが，ユニテリアン教会のなかでも有名な存在であった。夢二はユニテリアン教会の楽譜絵を描くなどしていた。

夢二が『夢二画集旅の巻』で「木村牧師を訪ねた。この人に遭うといつも強い刺激を受ける」(10)と述べている「木村牧師」とは，木村清松（1874−1958）のことである。この箇所での言及だけでなく日記やたまきへの手紙などで名前が出てくる木村牧師は，説教師として有名な存在だった。木村が京都の日本組合洛陽教会で「悔い改めたい者は前へ出なさい」と言ったとき，夢二が前に進み，「おれもとうとうクリスチャンになった」と言ったことはよく知られている。

木村は日本組合新潟教会で洗礼を受けており，プロテスタントに属する人間である。明治 19 年（1886 年）4 月に設立された日本組合基督教会は，明治 11 年（1878 年）1 月に設立された日本基督教伝道会社を前身とする。つまりさかのぼれば，新島襄による伝道活動に端を発する組織である。日本組合新潟教会で洗礼を受けた木村が，伝道を日本のみならず，朝鮮，満州，南洋，欧米にまで行ったことは尤もな行動である。

また明治，大正期のプロテスタントの世界において有名人であった植村正久（1858−1925）とも夢二は親交があった。夢二が『子供之友』や『新少女』の

仕事をしていた婦人の友社の羽仁もと子[11]のもとで植村の説教を聞く機会を得ていた[12]。

植村は日本最初のプロテスタント教会である横浜公会で明治 6 年（1873 年）5 月にバラから洗礼を受けている。日本プロテスタント教会の創生期に指導的役割を果たした植村は，名実ともにプロテスタント教会における重要人物であった。夢二が木村や植村といったプロテスタント教会の重要人物たちと親しい交わりをもっていたことは見逃してはならない事実であろう。

また，このような有名人以外にもプロテスタント信者が夢二の回りには多くいた。『竹久夢二抒情画展覧会目録』にも所蔵者として名を連ねている大藤昇は，夢二の支援者であるが，大藤もまた日本組合基督教会によって設立された岡山北部基督教会に所属の熱心なクリスチャンであった。夢二はこの岡山北部基督教会において，大正 7 年（1918 年）1 月に展覧会を行っている。また夢二と親しかった堀内清がキリスト教徒であったことはよく知られているが，堀内が属していた京都の平安教会もまた組合教会であった。

これらの人々は，ユニテリアンの星島を除いて，組合教会に属していたようだ。夢二が神戸で通っていた神戸教会も組合教会だったのだが，試みに夢二が神戸に出てくる二年前，明治 30 年（1897 年）の「基督教信徒統計表」を見ると，組合教会の信者数は 13,627 人であったことがわかる。プロテスタントの基督教信徒の合計数が 44,350 人であったから，プロテスタントの基督教信徒の 30％ が組合教会に属していたという計算になる。また，プロテスタントの基督教信徒数は，人口 1 万人につきの信者数に換算すると，たった 11 人である[13]。

この比率をふまえると，夢二のまわりにはプロテスタントに属する人々が多くいたが，その人たちは社会全体のなかではかなり限られた層ということがわかる。そしてまた，このごく一部の限られた人々は，社会のどのような階層に属する人々だったのだろうか。プロテスタントは明治期には農村にまず伝道されたが，明治末から大正期になると，人口の都市部への移動にともない信者層に変化が生じた。「明治 30 年代の後半からキリスト教の信徒層に著しい変化

があり，いわゆる“中間層”とよばれる，インテリ，サラリーマン，そして学生を中心とした人々が教会の主な構成メンバーとなっていった。彼らは明治後期の知識人に特有の自我のめざめを経験し，自己の確立についての悩みと不安を経験した“考えるホワイトカラー”（隅谷三喜男）であった」(14)という。

夢二のキリスト教に関連した作品は，エキゾチックな異国への憧れ「南蛮趣味」の点から語られやすい。だが，実際のところ，夢二の周りにあったキリスト教環境は，カトリックではなく，プロテスタントである。アカデミックな絵画教育を受けず，在野的印象が強い夢二が，ことキリスト教にかんしては，当時のプロテスタントの世界のエリートたちに囲まれており，夢二のキリスト教作品は，そのようなプロテスタントのエリートたちに支えられていたのだ。

終　わ　り　に

さて，話を『竹久夢二抒情画展覧会目録』に戻そう。夢二がどのような意図で目録に掲載する図版を選んだのかを明らかにした文献は今のところ見つかっていないが，第三室の作品はその当時の心境を表したものだという夢二自身の言及がある。

展覧会目録には，作品目録，図版のほかに，恩地孝四郎と有島生馬，そして夢二の文章が掲載されていることを先に述べた。その文章のなかで，夢二は，第三室の作品について，このように述べている。「作品のうちには随分前の時代のものや不純なものもあるけれど，自分の病気や会場の都合で作品の量の上にかなり不足があるけれど仕方がない。しかし第三室の作品の大部分は三月から四月へ渡っての製作で，今の自分の気持にかなり深く渉ってゐるものです。この僅かな作品が私の知れる人達に何ものかを語るか，與へるかすれば私は随分好い。」(15)

この頃の夢二は最愛の人笠井彦乃と交際していたが，彦乃の父親によって彦乃が東京に連れ戻されるなど，その交際が順調といえる時期ではなかった。第三室の作品が「自分の気持にかなり深く渉ってゐるもの」だから，第三室の作

品をもっとも多く図版として目録に載せたのかどうかは，想像の域を出ない。しかし，少なくとも夢二自身にとって，第三室の作品が「自分の気持」と深く関わるものであったことは指摘しておいてよいだろう。

キリスト教的表現が盛り込まれた作品として，第一室でみられたような南蛮趣味の作品は，いわゆる夢二式美人に代表されるような夢二の世界観を表していた。だが，一方で，第三室の作品は，一般に考えられているような夢二の作品世界とは一線を画する世界観を表現している。夢二にはたんなるエキゾチックな「異国への憧れ」「南蛮趣味」に由来して「キリスト教的主題」を扱ったというだけでは説明することが難しい「キリスト教的主題」の作品がたしかに存在している。そして，これは，夢二の周りにあった当時のプロテスタントの先進的な人々に支えられていたといえるのだ。

竹久夢二抒情画展覧会出品目録

第一室

82　三勝

81　張り物

80　逃げた小鳥

79　春眠　三好米吉氏蔵

78　三味線

77　松

76　修道院晩秋

75　ふらんしすかん

74　サンタマリヤ

73　紅燈歌

72　九連環

71　京都木屋町

70　戀慕夜曲

69　桃源種桃

68　星によする

67　早春

66　花束　星島義兵衛氏蔵

65　切支丹波天連渡来之図

64　落葉かき　星島義兵衛氏蔵

63　室之津懐古　三宅吉之助氏蔵

62　灯ともし頃

61　春宵　坂本春氏蔵

60　舞扇　大藤昇氏蔵

59　かみゆい

58　江戸の女

57　とつおひつ

56　時雨の炬燵

55　春けき國へ

54　屏風（《旅の唄》《邪宗渡来》）　稲田秀爾氏蔵

第二室

53　サーカスの女（2）

52　鴨東夜曲

51　サーカスの女（1）

50　都踊り

49　舞ひ

48　桃林

47　舞姫

46　秋（図版あり）

45　薬師如来（図版あり）

44　アマリヽス

43　江戸堀

42　秋のかゞみ
41　滿ちくるもの
40　椅子によれる女
39　海濱哀話
38　ある温泉場
37　ある少女
36　赤きカーテン
35　北國の海
34　チヨーチン
33　賣らるゝ少女
32　育つもの
31　夕べの露臺
30　秋によする歌
29　朝の露臺
28　比叡山　高山義三氏蔵
27　鹽燒場
26　病兒（3）
25　ある女
24　眠れる子供（2）
23　寂しき食卓
22　母への憧憬（図版あり）
21　とんぼ
20　病兒（2）
19　眠れる子供（1）
18　ある山の印象
17　酒倉
16　街裏
15　バロスキーの曲馬（3）

14　バロスキーの曲馬（2）

13　バロスキーの曲馬（1）

第三室

12　ノスタルジャーの唄

11　青葉の海

10　SPRING（図版あり）*七回忌展覧会ハガキでは《悲哀の奥に聖地あり》となっている。

9　山山山（図版あり）

8　悲哀の奥に聖地あり（図版あり）

7　愛（図版あり）*展覧会絵ハガキでは《純一な愛》となっている。
*七回忌展覧会ハガキでは《山・山・山》

6　祈り　星島義兵衛氏蔵

5　カンニットフェルスタン（図版あり）

4　日記　星島義兵衛氏蔵

3　湖のほとり

2　埋葬（図版あり）*展覧会絵ハガキでは《死》となっている。

1　病兒（1）

注

(1)　木下杢太郎「明治末年の南蛮文学」『木下杢太郎全集第 18 巻』岩波書店　1983 年　3 頁。

(2)　竹久夢二抒情画展覧会当時，絵ハガキが出された。

(3)　関谷定夫『竹久夢二―精神の遍歴』東洋書林　2000 年　305 頁。

(4)　長田幹雄編『夢二日記　2』筑摩書房　1987 年　315 頁。

(5)　原文では，Kannitverstan と綴られるこの語は，オランダ語で〈kan-nit-verstan〉と 3 語からなる言葉であり，「わかりません」という意味である。

(6)　遠藤祐ほか編『キリスト教文学事典』教文館　1994 年　537 頁。

(7)　ヘーベル（1760−1826）はドイツの教育者，牧師，詩人であり，エルランゲン大学で神学を修めた後，バーデン州の教会の最高位聖職者に任ぜられるなどした。

⑻　ヴァルター・ベンヤミン　野村修編『新しい天使　ヴァルター・ベンヤミン著作集 13』晶文社　1979 年　37 頁。

⑼　竹久夢二『砂がき』ノーベル書房　1977 年　102−103 頁。

⑽　竹久夢二『夢二画集旅の巻』ほるぷ出版　1985 年　頁数なし。

⑾　羽仁もと子は,「植村正久により信仰を深め，中産知識層にプロテスタンティズムに基づく合理的な生活倫理を説いた」（日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1126 頁）といわれる。

⑿　大正 4 年 4 月 3 日，9 月 9 日の日記に植村の説教を聞いたことが記載されている。

⒀　芳賀登，杉本つとむほか編『日本人物情報体系　第 96 巻』皓星社　2002 年　491 頁。

⒁　小野静雄『日本プロテスタント教会史（上）』聖恵授産出版部　1990 年　227−228 頁。

⒂　竹久夢二『竹久夢二抒情画展覧会目録』1918 年　12 頁。

――大学院文学研究科研究員――

図1 《寂しき食卓》制作年不詳『竹久夢二抒情画展覧会目録』金沢湯涌夢二館

図2 《悲哀の奥に聖地あり》制作年不詳『竹久夢二抒情画展覧会目録』金沢湯涌夢二館

図3 《埋葬》制作年不詳『竹久夢二抒情画展覧会目録』金沢湯涌夢二館

図4 《愛》制作年不詳『竹久夢二抒情画展覧会目録』金沢湯涌夢二館

図5 《カンニットフェルスタン》制作年不詳『竹久夢二抒情画展覧会目録』金沢湯涌夢二館